

聖書：ルカの福音書 15 章 11～24 節

説教：走り寄る神

## 1 父と弟息子

アドベンドの第二週を迎えて、皆さんの前には二本のろうそくが灯されております。世の光である主が、もう一步私たちの所に近づいてくださったことを現しております。

今日の箇所は、「放蕩息子のたとえ」として聖書の中でも有名なところとして知られております。この弟息子のようなことは、今でも時々聞きます。数年前でしたか、父親から大きな会社を引き継いだ息子が、部下に命じて自分の会社から何億というようなお金を捻出させ、その金をカジノにつぎ込んでしまったということがありました。世間は、その息子のしたことに驚きあきれ果てましたが、息子を指導する立場にあった父親にも非難の声が集中したように覚えています。

このたとえ話は、いまさら説明はいらないかもしれませんが、しかし、よく見ると不思議なことが沢山あります。たとえば 12 節。「弟が父に、『お父さん。私に財産の分け前を下さい』と言った。それで父は、身代をふたりに分けてやった。」

聖書の舞台となっている中東の文化では、息子の方から父親に財産を分けてくれと切り出すことは、父親に早く死んほしいと告げたのと同じことだと言われます。日本でもこれを同じことをしたら、おそらく多くの父親は怒るでしょう。ところが、たとえ話の父親は何も文句も言わず、息子に財産を分けて与えております。父親が弟息子の性格を知らないはずはありません。この息子が大きなお金

を手にしたら碌な事はないだろう。必ず大きな問題になるに違いない。父親ならそれくらいわかっていたでしょう。良識ある親なら、おまえの考えは間違っていると諭すでしょう。場合によってはしかりもします。それでもだめなら、「おまえなど勘当だ。縁を切る。出て行け。」そんな話にもなるところなんです。ところがこの父親は息子の言いなりになって財産を分け与えます。親ばかりはまさにこういう父親のことを言うでしょう。

この父親のばかき加減は、それだけではありません。20 節。「こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとにいった。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。」

使用人が沢山見ている前で、主人がなりふり構わず走り出す。中東の文化では、主人の威厳をそこなう、みっともないふるまいなのだそうです。そんな風に息子を迎え、大宴会を開きます。家の財産を食いつぶしたらしのない息子を喜んで迎える父親。だれが見てもあきれかえるほど、この父親は息子に甘い。もうこれは笑い話です。

このたとえ話に登場する父親。これはいったいだれのことか。何と、私たちの父なる神だと言うのです。そしてここに登場する弟息子。それは私たちのことであると言われます。いったいどういうことなのか。

## 2 息子の告白

## 1) 放蕩の果てに

少し詳しく見ていきます。弟息子は、父親を侮辱することと知りながら、平気で財産を要求しました。お金を手にするやいなや、家を飛び出しいなくなります。育ててくれた親への感謝もなければ尊敬もありません。ただ自分のことしか考えていません。手にしたお金で、有名リゾート地にプール付きの豪邸を建て、毎日パーティを開きます。すぐにいろいろな人たちが集まり、ちやほやします。札束があれば人を思い通りに動かせる。人の心さえ買うことができる。この世はすべて自分の思い通りに動かせる。しばらくそんな日々を楽しんでいました。

しかしいつまでもそんな生活が続くはずはありません。お金がなくなり、すべてが破綻してしまいました。家屋敷は人手に渡りました。仲間だと思っていた人たちは自分を捨て、だれも助けてくれません。運悪く大きな飢饉が起き、町は不況の嵐です。条件のよい働き口などありません。とうとう豚のえきでもよいから食べたいと思うまでに落ちぶれてしまいます。

## 2) 悔い改めたのか？

そのとき彼はこんなことを考えます。18節。「立って、父の所に行って、こう言おう。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。』」

みなさん。この18節のことばをどう考えるでしょうか。17節に「我に返ったとき」とあるので、これは息子が悔い改めた証拠だと思ふかもしれませんが。でもよく注意して読んでください。17節。「父のところには、パ

ンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。」彼が父の所に戻ろうとした動機は何でしたか。腹が減った。食べるものがない。でも父の所には沢山ある。だから帰ろう。ひとことで言えば、家に戻ろうとしたのは、ただ食べることが目的です。でもすぐに戻れません。問題が一つあります。財産を分けてもらい家を飛び出した身分です。帰ったとしても、父は怒って家に入れてくれないことはさすがにこの息子にもわかります。ですからなんとか父をなだめなければなりません。そこで考えついたのが18節です。もしかしてこう言ったら父は赦してくれるかもしれない。心から悔い改めたものではありません。父親の機嫌をとるために、悔い改めたふりをしている。そういうことばです。

## 3 神と人

### 1) 18節と21節の違い

そう考える理由があります。皆さんも気がついておられると思いますが、弟息子の告白は18節だけではなく、21節でもまったく同じことばで繰り返されています。18節は父親に会う前。21節は父親に会った直後。父親に会ったときになんて言えばよいか、あらかじめ準備していたのだから、18節と21節がまったく同じなのは当然である。そう思いますか。

この箇所は、18節と21節がまったく同じフレーズであることがポイントです。引っかけられないでください。同じことばを語ったから、息子の心の中もまったく同じだった。そうではありません。同じことばだけれども、18節を語ったときと、21節を語ったときとは、この息子の心の中はまったく状況が違

うのです。そこに注意してください。

## 2) 息子のなかに起きた大きな変化

18 節を語ったとき、息子はまだ父親に会っていません。父親はきっと自分のことに腹を立てるに違いない。そう思っています。まさか、父親が走り寄って抱きしめるなど想像もしていません。なんとか父親の怒りをなだめすかすためには、心を入れ替えたふりをするしかありません。そこで苦し紛れに考え出したフレーズが18節でした。

でも21節はどうでしょう。父親が自分の所に走り寄ってきたのを見たとき、驚きました。想像もしていませんでした。それでも、もしかして自分をしかりつけ、殴りつけようと怒りで顔を真っ赤にしているのかもしれないと内心びくびくしていました。けれども、父親の顔を間近に見たとき、自分の考えが間違っていたことに気がつきました。心の底からかわいそうに思って心配して、それで走り寄ってきてくれました。父に抱きしめられ、口づけされたとき、父が自分のことを心から赦していることを確信できました。

自分は父親のことを父とも思わず、利用するだけさんざん利用する、そんなことを繰り返す、尊敬もせず、足蹴にしてばかりし、財産を奪って使い果たす。そんな大馬鹿息子でした。けれども父親はそのことを何も言わない。ただ息子が帰ってきてくれたことを心の底から喜んでくれている。そんな父親の愛が自分をつかんで離そうとしません。父の愛を知って心からうれしくなりました。

いっぼうで、そのことがわかればわかるほど、自分がしたことが思い出され、つらくなります。ひどいことをしてしまったけれど、もう取り返しができない。涙があふれてきま

した。そして言います。21 節。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。」

## 3) 走り寄る神

神とはどのような方でしょう。このたとえ話の中にはっきりと現されています。息子を溺愛する愚かな父親。そんなふうにはか見えない。それが私たちの神だと言うのです。

でも、本当に馬鹿な父親なのでしょう。よく見てください。息子がどんなふうに変わったのかです。家を飛び出したときは、父親がどれだけ自分を愛しているのかわかりません。そんなことより自分を愛することのほうが大切でした。その結果、すべてのものを失い、みじめな境遇に転げ落ちていきました。

でも、今はどうなりましたか。自分がどんなにひどいことをしてきたのか。心から自分の罪を自覚しました。もう以前の彼ではありません。なぜ彼は変わったのでしょうか。父親は、自分が家を飛び出した日からずっと一日も欠かさず、息子の帰りをずっと待っていてくれた。腹が減ったので食べるために戻ろうとしたときも、父親は何も言わず、しっかりと抱きしめ、自分を赦してくれた。心から受け入れてくれました。そのとき、息子は大きく変えられていきました。

息子に甘い愚かな父親に見えました。けれどもよく見るとそうではありません。父親は息子を取り戻すためになにをしたのですか。息子を取り戻すために、ご自分のいのちを十字架で犠牲にされます。そして言います。「食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたの生き返り、いなくなっていたのが見つ

かったのだから。」

息子は、ただ腹を満たしたいと考えて家に戻りました。罪の自覚はほとんどありません。でも父の愛にしっかりと抱きかかえられたとき、自分の中にある罪が浮き上がってきました。「もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。」

神は、そのように告白するものを喜んでご自分の子と呼んでくださいます。